
tea break ?

龍門

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

tea break ?

【Nコード】

N1556K

【作者名】

龍門

【あらすじ】

人に合わせながら生きてきた。自称・カメレオンの川島凜子。

彼女はある日、世界の不思議に気付く。存在しない筈の人間が存在していることに。そんな時、彼女は完全無欠の生徒会長・咲隼秀里と出会う。

これが良い事が悪いかなどは解らない。でも、彼女は自分の世界を理解する。

tea break の続編。前作では書かなかった、川島凜子との出会いと、何故咲隼秀里の世界が変わったのか。全ては男の屈

・し
・のぎ。変わる世界と変わってしまった世界。儚いモノは心の中で

【印象】（前書き）

t e a b r e a k の続編！本当は書かないつもりが、この小説のタイトルとの繋がりを書き忘れ、あまりにも謎を残し過ぎ・・・。

多分前作から読んでくれた方が内容は伝わると思います！

【印象】

初めは

『偉そうな奴』

第一印象なんて、そんなもんでしょ？

でも、初めて話した？と言えるかな、まあ言葉を交わした時から、印象が変わった。

初めての会話と言うか、質問

『喜央京助を知っていたか？』

私は知っていると聞いた。でもそれだけ。

詳しい事は知らなかったから。

他の生徒達が話しているのを聞いた事があるから。

でも・・・。

私は、喜央京助なんて人を知らなかった。

この学校に存在するのか、しないのか。

そもそも、この世界にそんな人が存在するのか・・・。

けれども、私は知っていると聞いた。

嘘を言った。他の人と合わせる様に。変と思われない様に。

私は、人の中でしか生きられないから。
カメレオンのように、自分の性格を変えて。

でも、そんな自分が嫌いじゃなかった。どうしようもないよね・
・。

巧く生きていると思っていた。

けれど、少しだけ心が痛かった。

知っていると聞いた。たった一言の嘘が。

いつもの私なら、気にもしなかっただろう。
けれど・・心が、痛かった。

何故だろう。この人は多分、その喜央京助と言う人の事を、知り
たいのだろうと思ったから。

興味でも・なんとなくでもなく。
知りたかったのだろう。

その人の事を。何故かは解らない。理解出来ないだろう。今の私
では。

でも、私はその後、何故か涙を流した・・。

一面が白。上も、下も、右も、左も。

そこで、一人の男がこれまた白い椅子に腰をかけ、白い双眼鏡で下を見ている。

「覗き見ですか？悪趣味ですよ？」

白い本を持つ美しい女性が、双眼鏡を覗いている男に言う。

「覗き見とは失礼だな。俺は今人間観察しているんだよ？」

双眼鏡を覗く男は、覗いたまま反論する。

その姿を見て、美しい女性は溜息を吐く。

「見ても面白くないでしょ？」

女性が言うと、男は双眼鏡を上に掲げた。

「いや、今凄く面白い子を見つけた。世界が変われば良いって考えてる」

「そんなの、どんな人間でも思いますよ？」

そう女性が言うと、男は女性の方を向き、首を横に振りながら言

った。

「違う。違うのだよ。あの子の面白い事は、それを何も考えずに考え。そして、限りなくリアルに近い事なんだよ」

女性はまだ納得できてない様だ。

「そんな人間も沢山いますよ」

「そうだな・・・でも、彼女は・・・面白い」

先程上に投げた双眼鏡をキャッチしながら言う。

「ヨシ・・・。叶えてやろう。君の願いを・・・咲隼・・・秀里ちゃん」

そう言い、男はもう一度双眼鏡で、下を覗いた。

少し、おかしいと思ったのは、先生がこの学校に居ない生徒の名前を、あたかも居る様に言った事だ。

『喜央はまたサボりか？』

まるで、その喜央と言う人が最初から居る様に。

この時から、この学校に私の知らない存在が生まれた。

でも、正直それ程困惑しなかった。

その喜央と呼ばれる存在が、私の前に現れなかったからだ。

知らない存在は気味が悪いが、自然と私はそれを苦とは思わなかった。

不思議と・・・。

「あれ？」

双眼鏡を覗きながら、男が言った。

「どうしたのですか？」

「いや・・・一人だけ、気付いている」

男が言ったその言葉は、女性にとってはあまりにも衝撃的だった様だ。

「そんな筈は！貴方様の力が人間に効かないなど・・・」

女性を取り乱しているが、男は至って平然としていた。
それよりも、この状況を楽しもうとしていた。

「これは、これは。掘り出し物だな・・・」

その発言に、女性は怒り半分に呆れが半分だった。

「そんな悠長な事を・・・」

「・・・川島凜子・・・」

男は、双眼鏡で覗きながら唇を舐めた。

【印象】（後書き）

頑張るとしか・・・。

多分『tea?』は前作より早く終わると思います。

で、今回の主役は凜子です。まあ好きなタイプの人間ですね。作者自身カメレオンタイプだと思いますから。

自分を書いてる様で面白く、そして歯がゆいです（笑）でも、多分凜子は作者より良い子なんでしょうね。

前作で書かなかった事を書こうと思いますが、やはり多少はリンクはしてますよ。むしろん。じゃないと続編とは言えないですし・・・。
ええー続編とか姑息だな。みたいな感じですが、よろしく願います

それでは——・・・。

「変態」(前書き)

白い変態降臨。そして何かきつとフラグが立つ。
死亡フラグ？

【変態】

ある日突然。

見た事も、聞いた事もない人間と、この狭い箱の様な空間での、奇妙な生活が始まった。

生活と言っても、私からその人物に何かある訳でもなく、向こうが私に何かある訳でもないので、気にさえしなければ何ともない。

ただ、やはり周りの変化は少なからず、私にも影響するだろう。

私以外の人間はその人物の事を知っている。でも、私は知らない。

これは苦だ。人と違う。

私が異様が異常か・・・。

それとも、周りが異様で異常なのか？

例えば周りだとしても、結局は私が異常の類に入る。

それは苦だ・・・。

生き地獄の様に、この学校で私の居場所は無かった。

自分だけ違う環境に生きている様で、ここが本当の居場所じゃない様な気がして・・・。

「凜子」。また明日ね」

放課後。割と仲の良い友達と、別れる。

今の時刻は5時位だろうか？携帯を忘れてしまい時間が解らない。

それと、今私が居る場所は河川敷だ。

犬を散歩させている人達と良くすれ違う。その度に軽い会釈をする。

すると、一瞬風が収まった様な気がした。

すると、前か全身真白の不思議な男性が歩いてくる。

一瞬変態かなと思ったけど、見ただけそんな事思っちゃいけない
と思い、軽く会釈をする。

真白の男性も此方の会釈に気付き、会釈で返してくる。

良かった・・・変態じゃない。

そして、真白の男性とすれ違う。

「本当に・・・俺が視えているのか・・・」

すれ違い様、真白な男性は何か呟いた。

「えっ？」

振り返ってみたが、誰も居ない。

夢？幻？

私は一度首を傾げ、また振り返り、自分の帰宅路を進もうとした。
その時。

「あれ・・・？」

視界が揺らぐ・・・。ぐにやり、ぐにやり、と・・・景色が揺らぐ・・・。

その瞬間。私の意識は途絶えた。

「うう・・・。」

軽く眩暈。まだ少し視界がぼやける。

何度か目を擦り、自分が今居る場所を確認する。

「えっ・・・学校？」

私が目覚めた所は、学校。しかも私の教室だった。
どうして、何故、どうやって？

混乱。だが、何かを考えようとすると、頭痛がする。地味に効く
痛さだ・・・。

てか、私どうして気を失ったんだっけ？

まずはそこからだ。何故ここに居るのか後回し。
それよりも、何故気を失ったか。

確か、河川敷に居て。帰る途中で。そしてら・・・真白な・・・
。

「ああー！！！」

思い出した。あの白変態とすれ違って、その白変態が消えて、そ
して気を失ったんだ！！

えっ？もしかして私拉致られた？あの白変態に？ヤバくね？凄く
ピンチじゃない？

色々混乱。まあこうなるのはしょうがないだろう。

「ヤバ・・・私もしかして何か変な事されるんじゃない？」

一応服が乱れてないか確認。

「よし」

「何がヨシ？」

いきなり声が聞こえ、私は飛び跳ねた。

「凄い驚き様」

ゆっくりと振り向く。そこには先程の、いや、予想通りの白変態が居た。

「ななななななななな！！！わわわわわ、私をどうする気！！！」

混乱。混乱以外の何があると言うのだ。

「おいおい・・・落ちつけよ、川島凜子」

なっ！？

「もう私の名前まで調べてるの！？いやあ！！！！やめて！私はまだ汚れたくない！純粋な少女でいたいのに！！！！。まだ処女でいたいのに！！！！！！最初は素敵な男性に！！！！！！！」

結構支離滅裂な事を言っている。が、この場合仕方が無い。

ぶっちゃけ、悪いのは白変態だ。

「いやいや、襲う気何かないから・・・」

白変態は呆れた様に言う。

「変態は皆同じ事を言う！！！！」

別に変態を見た事がある訳ではない。ただ何となくイメージの話だ。

「おいおい・・・ホント酷いな君は・・・」

そう言い、白変態は頭を掻いた。

髪の毛まで真白。白髪？オッサンなの？若づくりしてるオッサン？

結構失礼な事を言っている。自分でも分かる。

「わ、私をどうする気ですか？」

若干涙目だ。もうこれは悪夢だ。

「だから、ただ話をしたかったただだよ」

信用などはしない。だって変態だから。

「それだったら、あの河川敷でも出来たじゃないですか」

私の方が正論を言っているのに、白変態はやれやれと言った顔をする。

「な、なにか私間違っていますか？」

半ば逆切れ状態。

「この学校で話さないと意味がないだろ？」

いや、貴方の言っている意味が解らないのですが……？

この学校じゃないと？何が？答えが解らない。てか、答えあるの？

「な、何の、こ、事ですか？」

すると、白変態が少し驚いた顔をした。

私、何か変な事言いました？

「気付いているだろ？」

白変態が尋ねてきた。だが、その質問の真意は解らない。

「何をですか？」

完全に呆れた様だ。また頭を掻く。

「喜央京助」

その名前を聞いて、解った。

あつ……この人は知っている。何かをとはいえないが、何かを知っているのだ。

多分。私と同じで喜央京助のイレギュラーに気付いている。じゃないと、「気付いているだろ？」なんて尋ね方はしない。

「解っているだろ？」

白変態が尋ねる。

私は頷く。それだけで通じると思った。

すると、白変態はにこやかに笑った。

そして、ビククリする程私の考え斜め上を通り過ぎる返答をしてきた。

「君・・・イレギュラーなんだよね・・・この世界の」

にこやかに。爽やかに。まるで死刑宣告。

「へっ？」

あれ？私死ぬんですか？

【 変態 】（後書き）

もっと、長くても良いんじゃない？少し短すぎた・・・。
何か書いてるときにこれで良いんじゃないかなと思います。

てか続きのネタが思いうかばず。

じゃー次回。みたいな結構適当な感じで・・・。

今回は後書き短くしようと。ダラダラやってもつぎだけですから。

それでは、また次回。よろしく&ありがとう

【被害】（前書き）

色々と疲れた・・・。

【被害】

「は？」

私が？えっ？私が？

「まだ理解出来てないみたいだな」

白変態はそう言い、頭を掻いた。癖なのだろうか。

そして白変態は一度大きく息を吸い、そして話し始める。

私の・・・終りか始まりを告げる様に・・・。

「喜央と言う存在は知っていると思うが、アレは本当は存在しないだが存在する。ここで矛盾と言うか、おかしいって事は分かると思う。存在しない筈の人間が存在する。てか、存在している時点で存在している事になる。」

混乱してしまう話だが、これは事実。

今この世界は存在しない筈の喜央京助を存在を認めている。これ自体が本当はおかしい事だ。ここまで付いてこられるか？」

白変態が尋ねる。ぶっちゃけ解らないが、一応頷く。

「では、何故喜央はこの世に存在しているのか。それは一人の人間が望んだからだ。」

誰かは言わない。いや、君ならいずれ気付く。

その人間は世界が変わる事を望んだ。この地球と言う世界ではなく、自分の世界を。

そこで、ある者がその願いを叶えてやった。喜央京助と言う存在をこの世界に認めさせた。認めると同時に、世界はその世界に住む人間の脳と言うか、まあ、記憶と言うかそれを書き変えた。いや、違うモノを上書きしたと言った方が良いか？まあ、どうでも良い。

簡単に言えば、世界が存在しない筈の人間を存在している事にした。ここで、言う世界に住む人間って言うのは全てを指している。だが、ここで問題が発生。なにか分かるだろ？」

そう言い、私の事を見た。いや、話している最中も私の事を見ていたのだけれど、ちゃんと見たと言うのか？詳しく言えないが、私を見たのだ。

そして、今私は問われている。ぶつちやけ何を言っているか理解できない。

SF？ファンタジー？リアリストの私にとって、それは理解しがたい事だ。

だが、現に喜央京助と言う男がこの世界に存在している事は事実では、この白変態が言っているのは事実なのだろうか？信じてもいいのだろうか？

それに・・・世界に住む人間・・・これは私も含まれている筈なのに、私には喜央京助の記憶が無い。

「私・・・ですか？」

私は苦笑いをしながら答えた。

「そうだ。全ての人間の筈が、何故かなんの取柄も無い女子高生だ

けがこの世界の変化に気付いている。これはあまりにも問題だ。問題過ぎてかなり問題だ」

最後の方は意味が解らなかった。

てか、取柄が無いって・・・酷いな。

「君以外の人間は皆喜央を知っている。まあ、皆と言っているが、喜央と直接関係してない人間は喜央の事を知らないが、少なからずこの、学校のこのクラスの人間は知っている。

そんな中、君だけは知らない。これは君以外が変なのか。それとも君が変なのか？

君はどっちだと思う？」

答えに困る。私は自分で自分の事を変とは言いたくない。別に私何もしてないのに、その世界が変わればと望んだ人間に、何で私が巻き込まれないといけないのか？見た事もない。そんな人間に・・・。

「私が変わじゃない。周りが・・・世界がおかしいの・・・」

本音。

白変態は少し笑った。不気味に。

「そうか、そうか。やはり君は面白いね。そうだよ。君の言う通り、この世界がおかしい」

そうだ。私は被害者だ。私はおかしくない。

すると、白変態はいきなり真剣な表情になった。

「でも、君は被害者じゃない。少なくとも・・・ね」

「は？何を言っている？私は被害者だ。私は何もしてない。私は・・・」

「予想外な事は、変われと望んだ人間が思ったよりも早く喜央と接触した事。」

そして、喜央の事を君に尋ねた事だ」

尋ねた・・・。喜央京助の事なんて・・・尋ね・・・られて・・・。

——咲隼秀里。

「咲隼・・・秀里が望んだの？」

私は尋ねた。すると、白変態はにこりと笑った。
そして言った。

「そう。彼女が今の世界の中心さ。そして、君も中心だ」

「何で私も？私別に喜央京助の事聞かれたけど、周りに合わせて知っているって言ったただだよ？それなのに何で・・・」

「そう。君は知っていると云った。だって知っていたのだから」

「は？知っていた？だから何度も言っているでしょ？私は・・・」
「いや、君はその時は知っていた。だが、君はその後、彼女・・・
咲隼秀里の心理を少し理解してしまった。それが原因。その時君は
喜央京助に気付いてしまった」

何を言っているの……。理解した？何を？あんな偉そうな奴の……。

——、知りたいんだな……。——。

「たつた……。あれだけで？あれだけで理解した事になるの？」

確かに、そう思った。何故かは解らなかった。でも、それが間違っているとは思わなかった。

でも……。たつたそれだけで……。

「まあ、普通ならあれだけだろうな。でも、彼女は特別なんだ。本当は彼女の心は誰にも理解出来る筈がない。喜央京助以外は。でも、君は理解してしまった。それが心理のほんのひと欠片でも。理解してしまった。その事で、君だけが枠から外れた。君は理解者になってしまった。咲隼秀里の、今の世界の理解者に」

何を言っている……。この人は……。何を？

「アンタ……。何者？」

尋ねた。何故そんなに詳しいのか。疑問の一つを解決させる為。だが、この白変態はさらに私が混乱する事を言った。

「俺は……。前の世界だ」

【被害】（後書き）

白変態の説明と言いますか、セリフというか、この現象の説明の部分。かなり疲れた。てか大丈夫かな。作者自身読んで理解できなかったもん。

矛盾してるんだろうなあ〜きつと。

苦情下さい。それを読んで精進します。

てか、少し話が大きくなってるよね・・・。

世界だもん。まあ、この後ですよ、問題は・・・。課題も・・・作者の・・・。

ええ、次もがんばります・・・。

【 神様 】（前書き）

作中で、神様の存在について書いておりますが
神様を侮辱する訳ではありません。

自分自身無宗教の為、この様な感じになりました。

決して神様を信じている人を馬鹿にしているつもりはありません。

話の流れからして、こう書くのが自然だと思いそう書きました。

【 神様 】

混乱？当たり前でしょ。

いきなり世界とか言われて、規模でか過ぎ……。

で、しかも今私の目の前に居る変態は、自分の事を世界と言った。

えっ？頭大丈夫？何か変な薬でもやっているの？

てか、これ夢でしょ？もしくは幻。

最近テスト勉強とかで疲れてたからなあゝもつと自分の身体気遣わないといけないなあゝ。

「おゝい。いつまで現実逃避してんの？」

私の顔を覗きながら白変態が言う。

コイツのせいで……。沸々と殺意が湧きあがる……。

「まあ、いきなり世界言われても理解出来ないでしょ？」

苦笑しながら白変態は頭を掻く。

「ええーまあ……。ちよつと、聞いても良い……ですか？」

質問してしまうと、奥深くまで行ってしまういそうで怖いが、聞かなければ納得も出来ないだろう。それに、このまま行けば否応無しに巻き込まれるだろうし……。

「何だ？」

白変態は私の顔を覗きながら尋ねる。

「今の世界は咲隼秀里なんですよね？」

「ああ、そうだ」

「それは何故ですか？そして、世界と言うのは人を指すのですか？それとも世界と言うのは俗称なんですか？」

まずは世界と呼ばれる・言われる理由だ。まずここを知らないと先には進まない。

白変態は腕を組みながら考えている。

「んー、そうだな・・・。まず、世界は世界だ。それは君が思っているのと同じ。だけれどそうした場合は、何故人の事を世界と呼ぶのか？それはこの世界が子供だからさ」

随分ザッパリとした解説。

白変態は続ける。今の段階で私が口を挟んでも意味はないだろうし。

「この世界では、世界を創ったのは神様だろ？でも実際は誰も神様の姿を見たなんて奴は居ない。たまに神様と崇められる人間が現れるが、それは神様を必要とする人間が造り出した嘘さ。だから世界は自分を創った神を、今この世に存在する者で代用する事にした。代用に意味は無いだろう。ただ存在させて、神と同じ事をさせようとしている。何でそんな事をする必要が在るかは俺には解らない。だが、世界は神様を必要としている。まあ、世界も人間と同じで不

安なんだ。子供が自分を産んだ親を必要とする様に、世界も自分を産んだ神様を必要としている。

この世界は子供なんだ。その為、代用で安心しようとしている。身勝手で、理不尽な事をしている」

一気に説明と言うか、何か宗教みたいであまりって言うか、全然現実味が無い。

これは信用して良いのか？でも話を聞いている感じ、この話は持論だ。全部を信用する必要は無いだろう。

「んで、何で俺や咲隼秀里の事を世界と呼ぶのか。実際呼ぶなら神様が妥当だろ？でもそうしないのは、神様なんて名乗れないからだ。この世界の創造主を名乗るのは思った以上にキツいんだよ。何か、訳の解らないプレッシャーを感じてるみたい。てか、俺がこの立場になった時にはもう俺等の事は世界って呼ばれていたよ。誰かが言いだした事なんだろうけど、そこは俺にも解らない」

これもまたザッパリとした、理屈の通らない持論。まあ、否定もしないけど信用もしない。

「そして、現在世界の咲隼秀里。これはぶっちゃけると俺が勝手に世界にした」

「……はあ？」

オイオイ……。曲がりなりにも一応神様みたいなポジションに居るんだろ？それなのにそんな勝手に良いの？

「いやあゝ、彼女視てたらついつい……。ねえ？」

いやいや、ねえ？言われても・・・。

結構勝手なんだな・・・世界も。こんな奴が勝手をやっても何もお咎めなしですか・・・。

「まあ、ぶつちやけ、彼女が世界になっても何も出来ないけどね。今彼女が世界なのは形だけだから」

白変態は続ける。

「彼女の願いを叶える為には外部からの力ではなく、自らの力の方が叶えやすかったんだよ。だから一時的に彼女を世界にした」

本当に勝手だなあ・・・この人・・・。

「それで、咲隼秀里の願いつて？」

「あれ？言わなかった？」

「具体的には・・・」

白変態は少し考えていた。

言い辛い事なのだろうか？無暗に聞かない方が私の為か？

「・・・彼女が望んだのは理解者と逃げ道だ。自分の事を理解してくれる人と、今の自分の周りが壊れる事を望んだ」

身勝手な・・・。

「身勝手・・・ですね。それにそれって唯の我儘でしょ・・・」

思っていた事をそのまま言った。

いや、これは彼女が生徒会長立場だから、と言う勝手なイメージが

生んだ事かもしれない。

「そうだね・・・でも、彼女はそれだけ望んだ。先を見ず、今を見て。過去を見ず、先を見た。そんな奴はこの世に沢山居るだろう。でも、俺は彼女の思考が好きだった。だから彼女にした。まあ、俺もただの我儘だよ」

この世には身勝手な奴が沢山居る。でも、世界を変えてしまう程の我儘は多分この人が初めてだろうな・・・。

「まあ、理解はしてないですけど、理解しました」

「まあ、そうだろうね」

白変態は笑いながら頭を掻く。

私は溜息を吐きながら、やれやれと首を横に振る。

すると、いきなり白変態が真面目な顔した。

そして、小さく、私にも聞き取れるか、取れないかぐらいの大きさに呟いた。

「・・・早過ぎる」

世界が揺れる。心の様に、炎の様に。危なげに、儚げに。

今、世界が動く。

・
・
・
不安定に
・
・
・
。

【 神様 】（後書き）

はい。まず前書きでも書きましたが、神様を信じている方を馬鹿にするつもりは全くありません。内容の流れでこう書きました。内容が違う方向に流れていたらまた違う事を書いていたと思います。

こう言う事ちゃんと言っておかないと色々誤解生みますから・・・。

ええー内容の説明ですが、まあ、時間の流れ的には喜央が消える少し前ぐらいですかね。てか、白変態と凜子の絡み長い。まあ、詰めれば一話で終わるんですが、作者の精神力と集中力が足りないので無理です。

多分誤字脱字多いですよ。もしあったら言って下さい。

「読みづらい」「解りづらい」「もっと詳しく」「文字が抜けてる・間違ってる」

「話に中身が無い」

色々言って下さい。それを読む度落ち込み、塞ぎ込みます。そして頑張ろうと思います。

それでは、また・・・。

「貴様」(前書き)

なんか、もう学園って言えない・・・。

【貴様】

自分の部屋に居た。

いつ帰って来たのかは解らない。てか、帰って来たのか？

辺りを見渡す。机・本棚・その中に収まっている数冊の漫画と小説・CDラック・・・私の部屋だ。

ええーと・・・。

私は思い出していた。

確か白変態と会って、いつの間にか学校に居て、そして世界の話聞いて、そして・・・あれ？何で今私自分の部屋に居るの？

てか、今までののは夢だったのかな？そうだったんだよ。うん。

「んな訳ないじゃん」

声。えっ？

辺りを見渡す。すると、闇の中に人影が。

「・・・だつ、誰？」

恐る恐る尋ねる。泥棒・殺人犯・変態・幽霊・・・どっ、どれだ？

「おいおい。声で分かれよ」

答えは変態でした。

「何で居るの？」

冷めた様な目で尋ねた。

「お前をここまで運んだんだ。礼ぐらいしろ」

「アンタが眠らしたんでしょ？」

学校に居る間は一応敬語だった。でも、不法侵入ですよ？犯罪じやん。

「違う。お前は倒れたんだ」

凄い真面目な顔で白変態は言う。

「は？」

もちろんこっちは意味が解らずキョトン顔です。

「説明してやる」

そう言っつて、白変態は床に座った。そして頭を掻く。そしてダルそうに口を開く。

「あの時、喜央が消えた」

「はぁ・・・」

リアクションに困る。別に私は喜央京助と面識が在る訳ではない。いや、無い。

それなのにいきなり消えたと言われても……。

「まあ、そのリアクションは間違っただけ。だって君は喜央と面識は無いからな」

そうですね……。呟く。それと、私がここに運ばれた事と何か関係あるのですか？心の中で呟く。

「俺の計画の中では、喜央が消えるのは彼女……。咲隼秀里がこの学校を卒業した時だ」

「じゃー何で消えたの？」

頭を掻く。この事態はこの白変態でも予測できなかったらしく、焦っている様だ。

「咲隼秀里は不良もどきと、本物の不良を創った。これは言ったよな？」

私は思い出すフリをする。どうでも良いから。

「まあー一応」

思い出してはない。てか、絶対言っただけ。

「その本物の一人瀬来間月と言ったが、その女と咲隼秀里が思った以上に早く接近した。それにより、瀬来間が存在しなくなって事に気

付いた」

「はい」

私は手を挙げた。

「何だ？」

白変態は目を細め、頭を掻いている。

「何で喜央京助は存在しているのに、そのセキマツキって子は存在してないのですか？」

当然の疑問。

喜央京助の事は学校の、少なからず私のクラスの人間と教師は知っている。これが世界が行った記憶の偽造だとしても。

では、何故セキマツキは存在していない？喜央京助と同じく、何故存在していない？

「咲隼秀里の思いが不完全だからだ。彼女は喜央の理想はかなり形になっていた。けれども、瀬来間の事はそれ程形になってなかった。だから不安定のまま、存在していた」

「存在？だって、さっき存在してないって・・・」

「瀬来間が存在出来るのは、屋上でだけだ」

屋上？

「屋上は今行けない筈でしょ？」

数年前に、屋上で遊んでいた数名の生徒。見周りにいた教師が屋上に人が居るかどうかが確認せず、屋上の鍵を閉め、その数名の生徒は屋上で一夜を過ごした。

その日の夜。その数名の生徒の親御さんが警察に捜索願を出していた。

見つかったのは次の日の朝。生徒達が登校してくる時間に、屋上で叫び、それに気付いた教師が屋上の鍵を開け、救出。

そんな事があって、学校は生徒が屋上に行く事を禁止した。けれども、禁止と言われると行きたくなるのが若者だ。

教師の目を盗み何度も屋上に行っていたが、それもバレた。

そこで教師達は屋上への階段をコンクリで塞ぐ事にした。誰の案かは知らないが、結構な暴挙だ。

鍵をかけても合いかぎを作られる。まあ、しょうがないか・・・。

「てな事が在って、今屋上への階段はコンクリの壁があって行けないよ?」

「まあ、もう行けないだろうな」

そう言って、白変態は悲しそうな顔をした。その顔の真意は解らない。

「何で?」

「消えたからだ。喜央が。喜央が消えたと言う事は、彼女が瀬来間の事に気付いた……。だが、喜央の事は気付いて無い筈だが……。何故だ？」

そう言つて、白変態は腕組をして考え込んだ。ブツブツ呟いている。呪文みたいだ。

そこで私は手を挙げ、自分の考えを述べた。

「生徒会長が気付いたんじゃないくて、喜央京助が自分から言つたって事はない？」

そう私が言つと、白変態は少し考え、ハツとした顔をした。

「そうか。だからこんな早く……。と言う事は喜央の野郎屋上から出やがったな……。いや……。まだ……」

また呟きはじめた。

パンツ！！

「ヨシッ！！」

いきなり手を叩いて立ち上がった。そして、白変態は私の腕を掴んだ。

「えっ？えっ？何？」

まさか本物の変態に？

「屋上に行くぞ」

「何で？てか、私関係ないじゃん！」

まあ、もうここまで来て、関係無いって言うのは無責任かもしれないが、ぶっちゃけ巻き込まれなくなかった。

「大丈夫だ。お前が台風の目だ」

「・・・どう言う意味？」

私がそう聞いた時、私と白変態の身体は白い靄の様なモノに包まれていた。

魔法ですか？なんか・・・リアルじゃないなあ。

目を開けた。てか、いつ瞑った？

「おいおい・・・会長以外の客は初めてだよ」

声がした。後ろからだ。

私は振り返った。

「アンタが・・・喜央？」

私が喜央と言ったら、本人は凄く驚いた様な顔をした。

「何で・・・何でお前は俺の記憶がある？」

「当たり前だ。この子は理解者の一人だ」

また私の後ろから声が。背後取るなよ・・・。

「アンタは・・・」

喜央が私の後ろに立っているだろう。白変態を見ている。

まあ、私も振り返ってないから白変態かどうか判らないけど、多分そうだろう。

「俺はお前の創造主に力を貸した者だ」

結構回りくどい言い方だ。

だけれど、喜央京助はそれで理解したようだ。

「成程・・・。このふざけたモノを仕組んだ奴か」

仕組んだ？私は振り返り、白変態の顔を見た。

背筋が凍った。白変態の表情は、恐ろしい程冷めていた。

「何を言っている？」

冷たい声。

「アンタはただ・・・退屈凌ぎにこんな茶番を仕込んだんだろ？咲

隼を選んだのは、彼女が自分の世界だけを望み、それ以上を望んで無かったから」

喜央の表情も恐ろしいモノだった。

「フン・・・お前と言い、咲隼秀里と言い、それに・・・川島凜子」
いきなり名前を呼ばれ、変な冷や汗が額から流れる。

「俺の計算が無駄になってしまったよ」
そう言い、やっと白変態の表情が柔らくなる。

だが、喜央の表情は険しいままだった。

「これは・・・何の茶番だ？ テメエーの退屈凌ぎに何で咲隼を使つた！ ！！！！」

キレていた。私は初めて同年代の人間に恐怖した。

「偽りの存在が・・・図に乗るな」

白変態の言葉は、感情が死んでいた。

「偽りにだって思考や心はあるんだよ」

「フン。その考え自体が図に乗っているって言っているんだ」

「テメエーがどう思うが関係無いんだよ！ なんで彼女を使つたか聞いているんだ！ 答える！」

「簡単だ。彼女が一番俺の退屈凌ぎにもってこいだった・・・それ

ただだ」

「彼女がこれからどんな思いで生きれば良いんだ！彼女は必ず自分が俺等を生んだ事に気付く。その時彼女はどんな気持ちになる！！」

「青二才が・・・そんな事俺が知った事か。それに・・・貴様が言わなければ良かったのではないか？」

「月の事に気付いた時点でこの茶番は終わりだ」

「彼女の世界を茶番と言うか。貴様の思考も俺と大差変わらないな」

「彼女の記憶を消せ。俺の記憶。月の記憶を」

「消す？それはできないな。世界を変えた事は彼女には一生背負ってもらうつもりだ」

この言葉が喜央京助の堪忍袋の緒を切った。

「貴様ああああ！！！！」

喜央京助は白変態の胸倉を掴み、殴った。

だが、白変態は倒れもさがりもしない。ただ、冷めた目で喜央京助を見る。

「お前がそう仕組んだんだろ？それなのに彼女にそれを背負わすのか！？」

「そうしなければ・・・世界は彼女を認めない」

私は喜央の言っている方が正しいと思っていた。私も甘い考えなのだろうか？

でも、この白変態の言っている事がどうしても正しい事だとは思わなかった。

理解してくれている存在が消える。これはどんな気持ちなのだろう。

辛いのだろうか？苦しいのだろうか？

私にはそんな関係の存在が居ない。だから、知りたかった。

私はふと、目線を落とした。

「えっ！？ちよっ！何？」

喜央京助の足が消えていた。静かに、白い光に包まれながら。

「ゲームオーバーだ。青二才」

白変態が言い放つ。

「・・・クソが・・・」

下からゆっくり喜央京助の身体が消えていく。

「これで終わりなら・・・俺は貴様を殺すぞ」

喜央京助の身体はもう無く、首が消えている。

「殺れるなら、やってみろ」

白変態は冷めた目で喜中央京助を見つめ、感情の死んだ声で呟く。

「――」

喜中央京助が何かを言った。けれども聴こえない。口だけが動いている。

だが、その口の動きを見た白変態は、啞然とした顔をしている。

それを見た喜中央京助は笑った。顔の半分が消えている為、断言はできないが、目を見れば分かる。

喜中央京助は笑った。ざまあ、見ろと。

そして、喜中央京助は完全に消えた。

そこで、私の記憶は途絶えていた……。

てか……私が倒れた理由聞いてない……。

【貴様】（後書き）

ええーいきなり白変態が悪役に。なんでだろう書いてると何故かね。嫌いなのかな・・・。

まあ、時期的には喜央が教室で咲隼に自分の事を言った日の夜ですね。

あの時はまだ完全に喜央は消えてなかった。

てか、その喜央が消える時、隣の教室では凜子と白変態が居ました。白変態気付けよ！まあ、その事の説明もありますよ。きっと。

この『tea?』で終わりたいなあ？は嫌だ。続編疲れる。嫌いじゃないけど。一から考えなくていいから。

まあここまで読んでくれた方ありがとう。
もう少し続きます。

「最後」(前書き)

少し中途半端ですが、幕引きです。

【 最後 】

変化は無かった。

喜央京助の存在は見事に消えていた。

だけど、一人だけ変わっていた。

咲隼秀里だ。

見た時に吃驚した。目元を腫らし、暗い顔をしていた。
まるで自分の世界が終わった様な・・・。

「咲隼さん」

私は思わず話しかけていた。見ていられなかった。偽善と言われ
ても言い返せない。

それと、彼女の変化の原因を知っている私は、同情に似た感情を抱
いていた。

「何？」

声に生氣は感じられない。抜けがらの様に、淀んだ瞳は私を捉え
てはなかった。

それ程にこの人は、喜央京助を想っていたのだろう。

「どうしたの？元気が無いみたいだけど」

その理由は知っているが、尋ねる。

「どうして？」

どうしてと言われても。何て言えば。

「いや、そう見えたから……」

「そう。なら大丈夫だから……」

そう言っただけで咲隼秀里は私から去って行った。

私は少し心配になり、咲隼秀里の後を追いかけた。

咲隼秀里は四階まで行き、ある扉の前で止まった。

あそこは……。

咲隼秀里はその扉のドアノブを回す。

——だが。

ガチャ、ガチャ、ガチャ——……。。

屋上への扉を開けようとするが、鍵がかかっており、開かない。
前までは行けたのだろう。

咲隼秀里はその場に崩れ落ちた。

「——どうして、どうして……」

繰り返す言葉。自分に言い聞かす様に呟く。

心が痛い。

何故、彼女はこんなに苦しんでいるのだろうか。どうして彼女は涙を流さないといけないのか。どうして……。

私は、いつのまにか泣いていた。でも、私はその涙を拭わず、咲隼秀里を見ていた。

差し伸べる手は、今の私にはない。

彼女が……咲隼秀里が求めている人は、喜央京助一人なのだから。

私は唇を噛んだ。口の中に鉄の味が広がる。

悔しかった。無力な自分が。どうして、私は何もできないのだろう？

どうして、私はこんなにも悲しいのだろう？

聞こえる泣き声を聞く事しかできない自分に、最低と言っ言葉を贈ろう。

放課後。私は屋上への扉の前に立っていた。

確信はなかった。でも、無理とは思わなかった。

あの白変態が言った。台風の日と言っ言葉。

まだ、終わって無い筈だ。この・・・退屈凌ぎは。

私はドアノブに手をかけた。

「気付くのが早過ぎるな」

一人の男と、女が屋上に居た。

「頭は良い方だと思っているけど？」

私は作り笑顔で答える。

「そうか・・・やはり誤算だな。君を選んだのは」

そう言って、白変態は笑った。作り笑顔で。

「そちらの女の人？」

私はもう一人の女性に目を向けた。

私と目が合うと、女性はニコリと笑う。作り笑顔で。

「俺の助手みたいな奴だ」

白変態は言う。

まあ、それ程興味は無い。

私は白変態に視線を変えた。

もう、この場に笑顔は無い。

「で、どうだった？この退屈凌ぎは」

「最低ね」

「それは俺に言う言葉じゃないな」

「ええー、自分によ」

簡単な事だった。

私はずっと巻き込まれたと思っていた。咲隼秀里を理解した？違う。

そう、簡単だ。

私は巻き込まれたのではない。ずっとこの変化の中心にいた。

私も、咲隼秀里と同じく望んだ。

私が望んだのは――・・・。

「私が望んだのは、変わる事。私が変わるのではなく、他人が変わる事を望んだ」

そう、私は周りに合わせて生きて行く事を、心の中で否定していたのだ。

私が変わるんじゃなく、周りが変われば良いのだと。

そこで、私が矛先を向けたのは・・・咲隼秀里だった。

私は勘違いしていた。彼女は何も苦労しないで生きてきたのだと。

私は巻き込まれた訳ではない。私がこの茶番の中心だった。

白変態が言う様に、本当は喜央京助が消えるのは咲隼秀里が卒業した時だった。

でも、私の望みがそれを邪魔した。

私は、心の中で他人の不幸を望んでいたのだ。

「私は・・・私は・・・」

涙が流れていた。

全ては私が。私の望みが、全てを狂わせ、喜央京助を消し。咲隼秀里を壊した。

喜央京助が言った事は外れていた。

白変態は考えていたのだ。この予想外の真実を。

「優しいね・・・」

私は白変態を見て、言った。

白変態は悲しそうな目をしていた。

彼は、途中で全てに気付き、私に接触してのだ。
そして、彼はワザとヒール役になった。

屋上のアレは、演技だったのだ。

「まさか気付くとはな」

白変態は苦笑しながら言った。

「考えれば簡単だった。だってアンタがヒント言いまくるから」

「それで解るのが可笑いなんだよ」

また苦笑しながら言う。

「私のせいで・・・彼女は・・・」

ダメだ・・・。また涙が出る。

「これで、君の世界の変化が終わった」

終わった・・・。傷跡を残して。

「だが、また始めてもらっ」

白変態が言う。私は白変態を見た。
始める？何を。まさかこの茶番を？

「勘違いするな。今回は君に変えて貰う」

意味が良く解らず、私は間抜けな顔した。

「喜中央助の存在を復活させるには、時間が居る。その間、君には
咲隼秀里の支えになって貰う」

白変態が言った。私は、驚きの顔をする。

「えっ？存在を復活なんて出来るの？」

「かなり難しいが、やるしかないだろ。長くても二年だ」

良かった。良かった。

私はその場に崩れ落ちた。

「だが」

白変態が低いトーンで言う。

私は顔を上げ、白変態の顔を見る。

「人一人の存在を復活させるには、人一人の存在を消さないといけ
ない」

えっ・・・。

「君が決める。喜央京助を存在させ、自分が消えるか。自分の為に、咲隼秀里を切り捨てるか」

残酷な選択だった。自分か他人を・・・。

他人の不幸を望んだ私に、他人の為に死ぬと言うのだ。

「これは・・・罰？」

私は空を見ながら呟いた。

「ああ」

そっか・・・そうだね。私は最低な事をしたんだ。これ位の罪を背負わないと、ダメだね。

「そう・・・だね・・・これは・・・罰・・・なんだよ・・・ね」

そっか、私は・・・死ぬんだ・・・。

直ぐではないけれど、死ぬ。いつかは人は死ぬけれど、それはいつかは解らない。でも、私は・・・少なくとも二年の間に死ぬ。

「俺は君に優しい言葉はかけられない。君がどうするか決める」

.....

「私は――」

C D ショップ

後ろから、秀と喜央京助の姿を見ていた。

あの時屋上で問われた、生きるか死ぬかの選択。
私は、死ぬ事を選んだ。

生きたとしても、きっと自ら私は命を絶つただろう。
そう考えると、私は楽な選択をしたのかもしれない。

秀と友達になるのは、かなり手こずった。
だからしつこく話かけ、しつこく遊んだ。

ある日、秀に名前と呼ばれた時、凄く嬉しかった。

同じ大学に行こうと言われた時、凄く嬉しかった。

その度に、死にたくないと思った。
泣き叫んで、願った。

その度に、秀の笑顔が浮かんだ。

私はその笑顔を二度も消したくなかった。

これは罪だと言い聞かせた。

そして、今に至る。

「良かったね・・・秀」

後ろから秀の姿を見る。

「少し時間がかかった」

横に白変態が立っている。
私は秀を見たまま話す。

「いや、早い方よ」

「そうか？」

そうよ。

「ねえ、最後のお願い」

「何だ？」

「秀から私の記憶を消して」

私の願いが以外だったのか。白変態が黙った。

「良いのか？」

「うん。だって、消えた人間の記憶なんて・・・悲しみしか残らないじゃない」

本当は覚えていて欲しい。けれど、その事によって秀が傷つくのは嫌だった。

親友だから・・・最初で最後の・・・。

「・・・解った」

白変態は少し考え、承諾してくれた。

「・・・ありがとう」

私は涙を流していた。静かに。ゆつくりと。

「さてと、どつかで茶でも飲んで行くか？」

不意に白変態が私に聞いた。

「お茶？」

「ああ。疲れたからな。ティーブレイク」

「午後の一息？柄じゃないでしょ？」

馬鹿にするように言つと、白変態は私の顔見て言つ。

「俺じゃなくて君だよ」

「私？」

「もう。終わったから・・・」

悲しそうに言う。そうか・・・終わったんだ。
終りと聞いても、不思議と涙は出なかった。

「そう・・・ね」

私と白変態はゆっくりと歩き出し、CDショップを出る。振り返らない。辛いから。

「ねえ、どこに行くの？」

「茶が美味しい所」

「それがどこよ？てか、あの女の人にバレたら怒られるんじゃない？」

「いやいや、アイツもう結婚してるよ」

「嘘ッ!？」

「ホントだよ」

「あらら。まあ、綺麗な人だもんね」

「そうだな」

「それと、喜央京助が消える最後に言った一言って何？」

「ん？ああゝあれか・・・いや、教えない」

「何で？教えてよ！」

「・・・下手くそって」

「下手くそ？・・・もしかして喜央京助も演技してたの？」

「打ち合わせ通りにな」

「最悪・・・私完全に騙された」

「騙される――」

「騙すな――」

少しずつ、二人の姿が消えていく。霧の様に。煙の様に。それでも、二人の声は聴こえる。笑う明るい声が・・・。

【最後】（後書き）

少し焦り過ぎたのかもしれませんが。
本当は後二話ぐらい続く筈だったのですが・・。

しかも最後少し悲しい感じに。
でもバットエンドではないです。

ええー少し裏話を・・・・・。

終わり方は？同様悩みました。それと凜子の世界の変化の理由です。
最初は凜子もハッピーエンドな感じにしよう思ったのですが、それではあまいりにもだったので、罰という形で凜子が消えるみたいな感じにしました。

無条件で消えた人間が生き返るなんて、そんな上手い話はないですよ。

それに見合った代償がないと。

凜子の記憶は、咲隼にはもうありません。これも背負わそうと思っ
たんですが、咲隼は十分辛い思いをしているので、背負わせない方
向で。

それでも内容的に結構無理やりな部分が多々ありますね。
これはもう、作者の力不足ですね。

でも、納得はしてます。

誰かの幸せは、誰かの不幸の上になっていると言っのを結構前面に
押し出した作品になってるのではと思います。

そして、他人の為に消えれると言う強さも表わせたんではと思っています。

それと、書いてない部分。咲隼と凜子が友達になるまでの部分とか。あれはぶっちゃけると長くなると言う理由と、もしその部分を書いてしまうと、咲隼が悪い子になってしまうからです。

作者の中では咲隼は被害者ですから。

これで終わりますが、読んでくれた方。感想お待ちしています。
それでは、また違う作品で……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1556k/>

tea break ?

2010年10月10日16時34分発行